The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	意見と価値観の不一致の発生と同調のプロセス : 20代の女性多人数会話において表出する外国人に関する意識を事例に
Author(s)	児島, 麦穂
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 59-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77008
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

意見と価値観の不一致の発生と同調のプロセス
—20 代の女性多人数会話において表出する外国人[1]に関する意識を事例に—

児島麦穂

1．はじめに

本稿の目的は異なった意見や価値観を持つ参与者らがどのように円滑に相互行為を行うのか、特にそのプロセスにおいて笑いがどのように機能するのかを解明することである。一般的に笑いは、ラポールを構築する機能、会話の進行を円滑にする機能、笑いの対象を傷つける機能などを持つことが明らかにされている (Boxer & Cortés-Conde, 1997; Murata & Hori, 2007)。本研究で扱う女性による会話について、笑いと関連性の高いユーモア研究では、男性によるユーモアが競争意識を表出するのに対し、女性によるユーモアは協調的で協働構築される傾向にあることが解明されている (Jenkins 1985; Hay, 2000; Holmes 2006)。特に、難波 (2018)は男女による会話の分析を行い、女性同士の会話において多く発生する同時笑いやあいづちが、参与者間の共感や協調を構築するプロセスを聞き手行動の観点から明らかにしている。本研究は女性友人同士による多人数会話に特定した研究であるため、男性同士の会話との比較を行うわけではないが、先行研究で明らかになった女性による会話やユーモアの特徴である、協調性や共感性といった同調を志向する相互行為が本研究でも観察されるのかを検証する。

今回扱うデータでは、20 代半ばの 3 名の参与者らがそれぞれの理想的な交際相手を語る中で「外国人男性が理想的な交際相手であるかどうか」を巡り、意見や価値観の不一致が生じる。これに参与者らがどのように対処するのか、参与者らが前景化させる意見や立ち位置に着目し、それに共通基盤化や仮説のシナリオの協働構築、笑いの共有といったプロセスがどのように関連するのか分析を行う。また、その中で観察される外国人に関する言説を、20 代半ばの日本人女性参与者らが、実際の日常的な会話で表出するステレオタイプとしての外国人のイメージとして着目し、明らかにしていく。そのため、1)参与者らはどのような外国人に対する意識を表出するのか、2)意見と価値観の不一致が発生する場面において、どのような笑いの性質や機能が観察されるか、3) 異なる意見と価値観を持つ参与者らは円滑な相互行為を維持するためにどのようなプロセスを実行するのかというリサーチクエスチョンを掲げ、分析を行う。

2．研究方法

2.1 データについて

本研究では、女性友人同士の自然談話を録画録音し談話分析を行った。その際、研究者が不在の環境にビデオカメラとレコーダーを設置し、自由に語るよう依頼した。そのような状態で友人同士の会話を収録することにより、仲間内の私的でカジュアルな笑い発生を含んだ相互行為の観察が可能となった。本研究で使用するデータは 2019 年 9 月に東京で収録したものである。データ協力者は以前同じ大学の同じ学部に通っていた 3 名で、現在は全員東京で働いている。

---

[1] 外国人とは、日本国籍を持たない者のことである（大辞林）。

会話参与者	年齢	職業	性別	関係	備考	データの長さ
EH	24	会社勤務	女性	同じ関西の大学に通っていた。現在も年に 1-2 回会う。	幼少期に海外での生活経験及び英語圏への留学経験がある。	25 分 4 秒
RH	25				英語圏への留学経験がある。	
RM	24				英語圏への留学経験がある。	

表 1. データの会話参与者基礎情報

2.2 分析枠組み

本研究は、Bamberg (1997, 2004)らを参考にし、相互行為の分析を行っている。また、会話参与者らが相互行為としてのナラティブを行う際に表出する立ち位置を分析するためにポジショニング理論(Bamberg, 2004)を援用する。ポジショニング理論において、参与者らの立ち位置は 3 つのレベルで構築される。ポジショニング・レベル 1 は、話し手がストーリー世界において、自己を何者として描くのかという話し手の立ち位置である。ポジショニング・レベル 2 とは、参与者らが相互行為の場において今、ここで構築する立ち位置であり、その場でのやりとりにより表出される会話参与者らの関係性もここに含まれる。ポジショニング・レベル 3 とは社会的な自己であり、ストーリー世界の自己を相互行為の場で聞き手に表明することで構築される。この理論を用いて相互行為を観察することにより、参与者らが表出する立ち位置の解明が可能となる。

さらに本研究は共通基盤 (common ground)(Clark, 1996)の視点からの分析を取り入れる。共通基盤とは人が相互行為において、互いが理解し合うために必要な背景知識などの基盤であり、会話参与者らの共同行為 (joint action)などにより、相互行為の場で共通基盤が確立されることを共通基盤化 (grounding)と言う(Clark, 1996, 92-121)。児島 (2019)は、共通基盤化が行われる過程、行われた後に発生する笑いを分析している。これにより、笑いが共通基盤化を補助・強化する機能を持つという笑いと共通基盤化の関係性を明らかにしている。

本研究では、ポジショニング理論と共通基盤の視点から談話分析を行うことにより、会話参与者の立ち位置がどのように表出するのか、参与者間で何が共通基盤となっているのか、どのように共通基盤化が確立されるのかを詳察し、これらが同調のプロセスに与える影響を明らかにする。

3. 分析

3.1 ステレオタイプにより表出する外国人に対する意識

本節では、参与者の 1 人である RH が自分の過去の交際相手や理想の交際相手について語る場面を分析する。その中で参与者らが持つ、外国人に対する意識が明らかになる中で行われる共通基盤の確立や共感のプロセスに注目して分析を行う。

[データ 1]

25. RH:[EH(とか)に言ってた時は
26. [((EH の方へ両手を向ける))
27. オーストラリア人に[ぞっこんやって:
28. EH: [((数回頷く))
(中略)
36. RH:そのあとイタリア人,スペイン人,
37. で今ブラジル人
38. EH:huhuhu
39. RH:[((笑顔))
40. RM:[↑今¥ブラジ[ル人?¥
41. EH: [¥なんか全世界
42. [制覇してるよな¥
(中略)
57. RH:[そうそうそう.自分が行った国より¥増えて

58.　　くるん[ちゃうかみたいな¥
59.　　[((手を口に当てて笑う))
60. EH:　　[ahahahaha
61.　　(.8)
62. RM:¥行った国より¥=
63. RH:=¥行った国より増えてきてる.
64.　　なんかおかしい¥
65. EH:((口を開けて笑う))
66. RM:¥え:ずる:いいな::¥

本データは参与者らが最近の恋愛事情について話題にした際に、RHが自身の外国人との交際経験を話す場面である。RHが過去の恋人の国籍を「オーストラリア人（中略）イタリア人,スペイン人，で今ブラジル人」と次々に述べた(27，36-37行目)ことに対し、EHが「¥なんか全世界制覇してるよな¥」(41-42行目)と笑いながら発言する。このEHによる「全世界制覇」という発言に含まれる「制覇」とは、「競技・試合で優勝すること」(大辞林)という意味である。これにより、この一連の笑いを伴った発言は、RHが次々と国籍の違う相手と交際している事実を笑いの対象にしており、特にその様子がまるで試合上で対戦相手を次々と倒していくようだと例えられている。

ここで、対戦相手及び攻略して数を「増やす」(57，63行目)存在として語られているのは、交際相手としての外国人男性である。このような語りに、実際に次々と外国人男性と交際しているRHも、他の参与者2人も笑いながら参加していることにより、参与者らは交際相手としての外国人男性を「制覇」の対象とする視点を共有していることが伺える。さらに、このような交際経験を持つRHに、RMは「¥え:ずる:いいな::¥」(66行目)と述べていることから、RMらが外国人男性と交際することを憧れとし、彼女たちがこれを(日本人との交際より)優位であると捉えていることがわかる。今後このような視点を共有する参与者らが、自身の経験を基にステレオタイプを表出し、発生する意見の不一致を巡り交渉を行う様子を分析していく。

［データ2］

73. RM:なにじんが自分(.)
74.　　的に合うな,とかある?
75. RH:最近な:(.) でもやっぱり:意外に:
76.　　(.5)イギリス人がやっぱいい
77. RM:[へえ:::
78. EH:[へえ:::
79. RH:なんか働くマインドとかが似てる
　(中略)
186. RH:やけど:なんかあの人たちも比較的さ:
187.　　こう,働くことに結構なんていうの
188.　　タイトな人たちやん.結構働く人たちやん
189. RM:[そうなんや:
190.　　[((頷く))
191. EH:[((数回頷く))
192. RH:その国のマインドは結構日本人が
193.　　わかってもらえる
194. RM:[あ:::
195. EH:[((数回頷く))
196. RH:遅くまで働いてでも:
197.　　[$_1$コミットしなあかんっていうのを
198. EH:[$_1$((数回頷く))
199. RH:[$_2$わかって
200. EH:[$_2$あ::
201.　　[$_2$((数回頷く))
202. RH:[$_3$くれる人たち.[$_4$比較的
203. RM:[$_3$あ::ちょっと¥ブラックな¥
204. EH:　　[$_4$((数回頷く))
205. RM:[$_5$¥マインド¥
206. RH:[$_5$¥そうそうそう.ブラックなマインド.
207.　　[$_5$((数回頷く))
208. RH:そう[$_6$そそ¥
209. RM:　　[$_6$ahahahaha
210.　　[$_6$((手を叩く))
211. EH:　　[$_6$hahahaha
212.　　¥それが合う↓ん¥=
213. RH:=¥それが合うねん¥=
214. EH:[=¥それが合う↓ん¥
215.　　[((頷く))
216. RH:そう,なんかヨーロッパの人たち
217.　　やっぱさ:
218. EH:[$_1$まあせやな
219.　　[$_1$((頷く))
220. RH:[$_2$早く帰りたいからさ:(.5)
221. RM:[$_2$((数回頷く))
222. RH:[$_3$なんでそんな遅くまで働いてるの
223.　　(とかさ)
224.　　[$_3$((右手を持ち上げる))
225. EH:[それ説明すんのも[な
226.　　[((頷く))
227. RH:[しゃ:ないやん
228.　　[((右手を持ち上げる))
229.　　そう [めんどくさい
230. EH:　　[めんどくさいし[な
231.　　[((頷く)

データ 2 では、RM が「なにじんが自分(.)的に合うな,とかある?」(73-74 行目)と質問すると、それに RH が「意外に:(.5)イギリス人がやっぱいい」(75-76 行目)と返答し、その理由に RH は、「働くマインドとかが似てる」(79 行目)と述べる。さらに「結構働く人たち」(188 行目)、日本で働いている自分が「遅くまで働いてでも:コミットしなあかんっていうのをわかってくれる人たち」(196-197,199,202 行目)と自分が持つイギリス人へのイメージを述べる。これらの発言により、RH は理想の恋人像を自身の交際経験からイギリス人とし、その理由としてイギリス人は「働くことに真面目」である点において日本での RH の働き方と似ているため、RH が長時間残業などを行いながら一生懸命働かなければいけない状況を理解してくれるためだと述べる。このイメージは、RH がイギリス人に対して持つステレオタイプであり、RH が自身の過去のイギリス人との交流経験から形成されたものだと考えられる。

また、RH が交際相手の理解して欲しいという日本での働き方を、RM が「ブラックなマインド」(203,205 行目)と評したことに、参与者全員が笑いで反応する(206-214 行目)。「ブラックなマインド」とは、「ブラック企業」という言葉が労働環境の悪い企業を指すように、長時間残業を行うといった私生活よりも仕事を優先する働き方を意味していると考えられる。この発言により笑いが発生しているのは、本来否定的な意味を持つ「ブラック」という言葉が、RH が交際相手に理解して欲しいという自分の働き方を表す際に使われたことが、おかしみを生じさせたためだと言える。このような笑いが共有されたことにより、RH が語る交際相手に理解して欲しい働き方がどのようなものか、参与者全員が理解していることが確認されたと言える。

また、RH は海外出身の交際相手らに自身の働き方が理解されなかった経験を「ヨーロッパの人たち」(216 行目)は仕事よりも私生活を重視するため、「なんでそんな遅くまで働いてるの」(222 行目)といった批判を受けたと述べる。イギリスはヨーロッパの一部であるが、本場面において「ヨーロッパの人たち」という発言は、彼らの働き方を、RH の日本での働き方やステレオタイプとしてのイギリス人の働き方と対比させる目的で行われている。また、RH がデータ 1 で明らかにした交際歴を考慮すると、ここで「ヨーロッパの人たち」と定義されているのは、特にイタリア人やスペイン人といった「イギリス人以外のヨーロッパ出身者」を指すと推測できる。つまり、RH はイギリス人以外の海外出身の交際相手（特に、イタリアやスペインなどのイギリス以外のヨーロッパ出身者）から自身の私生活を犠牲にする働き方が批判され、価値観が合わなかったために交際が継続しなかった経験を持つということが語られている。この経験や実際のイギリス人との交際経験に基づいて、RH は、ステレオタイプとして真面目に働くイメージを持っているイギリス人であれば、自分の日本での働き方を理解してくれるであろうという理由から、理想の交際相手としてイギリス人を挙げていることが明らかになった。

RH が明らかにした価値観の違いから外国人男性との交際の継続が困難であったという経験の語りに、EH は「それ説明すんのもな」(225 行目)、「めんどくさいしな」(230 行目)と頷きながら共感を示す。これらの EH の発言のタイミングに注目すると、先取り発話や同時発話で行われている。これらの先取り・同時発話は、秦(2019)が明らかにしているように、ここまでのやりとりや個人が持つ経験をもとに、参与者らが互いの発言を予測することが可能となり発生するものであるため、共通基盤化の確立を示していると言える。つまり、EH と RM は当初、なぜ RH がイギリス人を理想の交際相手とするのか理解していなかった。しかし、RH が持つイギリス人に対するステレオタイプとしてのイメージと過去の経験が語られ、RH が理解して欲しいという自身の働き方に関して笑いが共有されたことにより、「RH が自身の私生活を犠牲にする働き方が交際相手に理解されることを理想と

している」、「(外国人男性など) 自分の働き方を理解してもらえない相手と交際することは困難である」という認識が共通基盤として確立されたと言える。このプロセスにおいて、参与者らはRHが表出するステレオタイプとしてのイギリス人のイメージに関しては同意していないものの、(外国人男性に限らず) 一般論として交際相手に自分の働き方が理解されないことは交際を続ける上で困難であるという点において共通基盤を確立し、RHに共感を示していると言える。

3.2 意見と価値観の不一致の発生と後景化のプロセス

本節で扱うデータ3では、外国人男性と交際することに憧れを持つRH・RMと、実際に日本人の恋人がいるEHの間で意見と価値観の不一致が発生する。これを対処する手段としてデータ4では、参与者らは意見の表明方法や表出する立ち位置を調整し、全員が参加可能な笑いを共有することで不一致を後景化させるプロセスが取られていた。この笑いの協働構築のプロセスをポジショニング理論の視点から分析していく。

[データ3]

399. RH:EHとか逆になんで帰国子女やのにさ,
400. 日本人でいいって思うの?
401. (.4)
402. EH:huhu[huhuhu
403. RH: [それこそさ,なんか(.3)
404. え,もっと海外の人やったりとか
405. 思わんかったん?
406. EH:なんか別にそこは:
407. RH:あんま思わんねやん=
408. EH:=うん
409. RH:へ:::
410. EH:でも,やっぱ最終的にせい(.)かつ:の:(.)
411. なんか, 就活とか:
412. RH:あ:
413. EH:そん時就活の(タイミング)[やったし:
414. RH: [あ::
415. EH:なんかそこの:基盤をわかってくれる
416. のは日本人かな[と思って
417. RH: [あ:確かにな:
418. [((数回頷く))
419. やっぱそういう, わかるわ
420. (.6)
421. RH:生活の仕方[$_1$みたいなのね,
422. EH: [$_1$¥そやな¥,
423. RH:¥仕方みたいなとこね¥
424. EH:[$_2$¥生活の仕方を¥
425. RM:[$_2$うんうんうん

この場面ではまず、RHが「EHとか逆になんで帰国子女やのにさ,日本人でいいって思うの?」(RH,399-400行目)と質問し、これにEHが0.4秒の沈黙(401行目)後、笑いで反応(402行目)している。その後RHはさらに、「もっと海外の人やったりとか思わんかったん?」(403-404行目)と質問を続けると、EHは返答を開始し、「やっぱ最終的にせい(.)かつ:の:(.)(中略) 基盤をわかってくれるのは日本人かなと思って」(410,415-416行目)と述べる。これらのRHによる質問は、「交際相手は日本人より外国人の方が良い」、「海外での生活経験がある者であれば外国人男性を好むだろう」という前提に基づいていると言える。このような質問を、実際に日本人の交際相手がいるEHに対して行うことは、「海外での生活経験があるEHであれば、外国人男性と交際する方が良いはずなのに、なぜ日本人と交際しているのか」という意味に捉えられるため、EHの価値観及び実際の生活を否定する攻撃性を孕んだ質問であると言える。これにEHは笑いで反応しており、この笑いの前にわずかな沈黙があることを考慮すると、ここでの笑いはNamba (2011)が明らかにしている明確な返答を回避するための笑いであると分析できる。このような回避の行動が取られたにも関わらず、RHがさらに質問を続けたため、EHは外国人男性からは就職活動といった日本独自の習慣が理解されないという点を指摘する。その上で、交際相手に日本で生活する自分の生活が理解されないことは交際を継続する上で困難であるため、日本での生活の基盤を共有している日本人との交際が自分にとっては好ましいと説明する。EHはこのように説明することで、「(外国人男

性など)自分の働き方を理解してもらえない相手と交際することは困難である」というデータ2で共通基盤化した認識を再度提示しつつ、この条件に当てはまる交際相手は結局日本人であったと自分の見解を述べていると言える。これに RH と RM は、「わかるわ.生活の仕方みたいなのね」(RH,421 行目)、「うんうんうん」(RM,425 行目)と同時発話を伴いながら共感を示している。

データ3の場面を整理すると、参与者間で外国人男性が理想的な交際相手であるかどうかを巡り、外国人男性との交際を憧れの対象としている RH・RM と、現在日本人と交際している EH の間で意見と価値観の不一致が表面化した。この不一致に対処する手段として本場面では、参与者間で既に共通基盤化されている認識が持ち出され、それに基づいて EH の意見が個人の見解として述べられていた。このプロセスにより、参与者間の意見と価値観の不一致は解消されていないものの、参与者間での共感が達成されていた。

[データ4]

470. EH:でもな, 赤ちゃんの顔とかちょっと
471. 考えてまうけどな:=
472. RH:[=大丈夫.EH 自分がいい顔[持ってるから=
473. [((手を EH の方へ出す))
474. EH: [((首を振る))
475. RM:=そやでもうハーフ[やもん.生まれながらに
476. RH: [君は大丈夫やから
477. [$_1$君は大丈夫
478. RM:[$_1$しかも結構顔濃くない?(.4)彼
479. RH:[$_2$EH も- そうそう
480. EH:[$_2$濃いねん
481. RM:え,だから絶対可愛い=
482. RH:=濃い[同士やん
483. EH: [濃いけどさ:顔でかいねんやんか:
484. [うちも顔でかいからさ:
485. RH:[そんなん EH が[チッて=
486. [((両手を縮める))
487. RM:=何を言ってんの?
488. RH:じゃもう,ちっちゃい時から
489. [マッサージしとけばいいやん
490. [((自分の前でマッサージする仕草))
491. EH:huhaha[haha
492. RM: [huhu
493. [¥かっさかっさ¥hahaha
494. [((空中でマッサージをする仕草))
495. EH:[¥小顔になれ:¥
496. [((空中でマッサージをする仕草))
497. RH:[huhuhu
498. [((空中でマッサージをする仕草))
499. RM:¥ちっちゃい頃かかっさ¥
500. EH:ahaha[haha
501. RH: [¥顔が-骨格が変わるから¥huhuhu
502. RM: [hahahaha
503. ((手を叩く))
504. EH:[hahaha
505. RM:[¥可愛い:可愛い:¥
506. 痛い痛い痛いゆうて[( )
507. RH: [¥我慢我慢や¥
508. RM:[((手を顔に当て痛がる仕草))
509. [痛い痛いいたいた[つって huhu
(中略)
529. RM:[$_1$(あか:ん)将来やし,将来感謝するで
530. [$_1$((赤ちゃんに話しかけながら,
531. マッサージする仕草))
532. EH:[$_1$¥泣きそ:¥
533. RH:[$_1$hahahaha¥[$_2$そうそうそう¥
534. [$_2$((頷く))
535. RM:[$_3$将来ママ,ママに感謝するで:ehehe
536. [$_3$((赤ちゃんに話しかけながら,
537. マッサージする仕草))
538. EH:[$_3$ahahaha, ahahaha
539. RH:[$_3$hahaha

データ4では、参与者らは褒めとその回避を行う中で、おかしみを生む仮説のシナリオが構築され笑いが共有される。EH は、「でもな, 赤ちゃんの顔とかちょっと考えてまうけどな:」(470-471 行目)と発言すると、RH と RM はラッチングで「大丈夫.EH 自分がいい顔持ってるから」(472 行目)、「そやでもうハーフやもん」(475 行目)と述べる。EH による将来生まれてくるであろう子供の外見が気になるという発言は、逆説「でも」を伴い、外国人男性との交際に憧れを持つ RM・RH に対して行われている。これを考慮すると、この発言は「生まれてくる子供の外見のことを考えると交際及び結婚相手としては外国人男性が好ましい」という意味に捉えられるため、EH は RH・RM の「交際相手は外国人男性が良い」という意見に合わせるためにこの発言を行ったと考えられ

る。しかしながら、このような発言をEHが行うということは、日本人の恋人がいる自身の生活を否定することにもなるため、RHとRMは「EHは大丈夫」とEHの外見への褒めをラッチングで行うことで、EHによる自己卑下を即座に否定する。さらにこのEHとEHの恋人の外見に対する褒め(478行目)に対しても、EHは474行目で首を振るジェスチャーで否定し、自分も恋人も顔が大きいことに言及する(483 行目)。このように褒めとそれを否定するプロセスが繰り返されているのは、褒めの受け手が褒めに同意することは自画自賛に繋がる (Pomerantz, 1978)ため、これを回避するための行動だと言える。つまりRHとRMがEHとEHの外見が良いと褒めたため、自画自賛を回避する方策として、EHは自分と恋人の外見を「顔が大きい」と否定的に再評価したと分析できる。これらの日本人であるEHに対しての褒めも、EHがまるで「ハーフ」のように外見が良いという内容であることから、この場面においての参与者らの発言は「外国人との間に生まれた『ハーフ』の子供は外見が良い」という参与者らが持つ認識を表出するものである。

このような褒めとその否定の繰り返しの中で、RH は「じゃもう,ちっちゃい時からマッサージしとけばいいやん」(488-489行目)と発言し、これにEHとRMは笑いで反応する。これは、「もし生まれた子供の顔が大きかったとしても、幼い頃から顔のマッサージをすれば顔の小さい外見の良い子供が育つ」という仮説のシナリオ (Georgakopoulou, 2001)に対する笑いである。仮説のシナリオ(hypothetical scenario)とは、「もしXが起こったとしたら/起こったと仮定して」展開する実際には起こっていない出来事のシナリオである (Georgakopoulou, 2001: 1892-1893)。このシナリオが「赤ちゃんに対して成人が行うような『小顔マッサージ』を行う」という非現実的な場面を描いているため、その滑稽さに参与者らがおかしみを感じたと考えられる。RMとEHは同時発話で「¥かっさかっさ¥hahaha」(RM, 493行目)(「かっさ」マッサージとは小顔効果があるとされているマッサージ方法)、「¥小顔になれ:¥」(495 行目)と同時発話で笑いながらシナリオの詳細を追加する。この際の参与者らのジェスチャーに注目すると、494、496、498行目において参与者全員の空中でマッサージする仕草が同期している。またここでのジェスチャーは、互いの目を見ながら空中の高い位置で行われているのに対し、EHによる514行目以降、マッサージの仕草が低い位置で行われており、視線もまるで赤ちゃんの顔を覗き込むように下へ向けられている。さらに、RMは「将来ママ,ママに感謝するで:ehehe」(535行目)とシナリオ内の母親として赤ちゃんに語りかけるような発言を行っている。

このような点に考慮して、この仮説のシナリオが構築される様子をポジショニング理論の視点から分析すると、シナリオ内の自己であるレベル1において、参与者らは「マッサージを嫌がる赤ちゃん」と「赤ちゃんに語りかけながらマッサージを行う母親」を演じている。これにより参与者らは、レベル2(会話の場においての立ち位置)において、生まれてくる子供には外見が良く育って欲しいという「子供の外見を気にかける将来の母親」としての立ち位置を表出していると言える。このような仮説のシナリオが協働で構築されたことにより、参与者らは社会的自己として、自らを(将来の)母親同士として表出している(レベル3)。

データ4の分析をまとめると、参与者間にはこれまで、理想とする交際相手が外国人男性であるかどうかを巡り意見と価値観の不一致が生じていた。この状態においておかしみを生じさせる仮説のシナリオが協働構築されたことにより、意見と価値観の不一致が後景化され、参与者らが将来結婚・出産を経験することを前提として、どのような相手と結婚し子供を産んだとしても外見の良い子供に育って欲しいという点で同意していることが前景化されていた。このような参与者らの「将来の母親」としての均衡な立ち位置が前景化される仮説のシナリオが笑いの対象とな

ったため、参与者らは全員笑いに参加することができ、同時にこのような笑いが共有されたことにより参与者らの均衡な立ち位置が強調されたと言える。また、このプロセスにおいて、多く観察された類似するジェスチャーや笑いの共起は、参与者の協調を示すものである(難波 2018)。このような言語行動、身体行動により参与者らは互いの同一性及び協調性を表出していたと言える。

4．考察

4.1 参与者らが持つ外国人に対する意識

データ 1 では、外国人と交際することが試合のように例えられ、交際相手としての外国人男性が対戦して数を増やすべき対象のように扱われる語りが笑いと共に行われていた。またデータ 2 では、RH が海外出身の交際相手が自分の日本での働き方を理解してくれることが好ましいと語る中で、「イギリス人は(日本人に似て)仕事に真面目である」、「イギリス以外のヨーロッパの人々は仕事よりも私生活を重視する」といったイギリス人・イギリス以外のヨーロッパ出身者に対するステレオタイプが表出していた。データ 4 では、「外国人男性と交際及び結婚し子供を産んだとしたら外見のいい子供が生まれる」という参与者らが持つステレオタイプとしての認識を前提として、どのように外見のいい子供を育てるかといった仮説のシナリオが構築されていた。

本来、排除や差別といった否定的な言説となる外国人に対するステレオタイプが、本稿で扱ったデータでは 20 代女性である参与者らが友人同士との私的な相互行為において、外国人男性との交際を憧れの対象として好ましく捉える中で発生していた。参与者らは自分たちの理想を語る上で、外国人との交際を日本人との交際より優位に捉え、外国人や外国人との間に生まれた「ハーフ」の子供は外見がよく、また価値観の違いによる困難があるものの理解し合える存在として認識していた。また、このような語りにおいて描かれている外国人は、RH の過去の交際相手の国籍(オーストラリア人、イタリア人、スペイン人、ブラジル人)や、外国人との間に生まれた子供は日本人と異なる外見を持つといった言説から、アジア人は含まれていないのではないかと推測できる。

4.2 意見と価値観の不一致が発生する相互行為においての笑いの性質と機能

データ 1 の分析では、RH が次々と外国人男性と交際していることが、まるで試合で対戦相手を倒していくようだとする笑いを共有したことにより、参与者らが外国人との交際を憧れとして捉えていることが明らかになった。データ 2 では、RH が海外出身の交際相手に理解して欲しいと述べる自分の働き方をブラックと表現したことで笑いが共有されていた。これにより、RH が語る交際相手に理解して欲しい働き方がどのようなものか参与者らが理解していることが共有され、その後の「(外国人など) 自分の働き方を理解してもらえない相手と交際することは困難である」という共通基盤化に繋がっていた。

データ 3 では、RH が EH の生活や価値観を否定するような質問をしたため、返答を回避するための笑いが観察された。このような質問により参与者間の意見と価値観の不一致が表面化した後、「外見のいい子供を育てるために幼い頃から小顔マッサージをする」という仮説のシナリオが協働構築され、笑いが共有されていた(データ 4)。このシナリオは、参与者ら全員を「将来の母親」に位置付け、「どのような相手との子供であったとしても、外見のいい子供に育てたい」という点で参与者らが同意しあっていることを示すものであった。このような仮説のシナリオに対しての笑いが共有されたことにより、参与者らが同一の立ち位置に立っていること、外見のいい子供を育てたい点で同意し合っていることが前景化され、意見や価値観の不一致が後景化されていた。

このような笑いが観察されたことにより笑いが、参与者同士の視点を共有、共通基盤化の補助、答えづらい質問への返答の回避の機能を持つことが確認された。また、意見や価値観の不一致が発生した場面において、参与者ら全員が均衡な立ち位置に立ち、同意できる内容を対象として共有される笑いが、意見や価値観の不一致を後景化し、参与者らの同一性を確認及び強調する機能を持つことが明らかになった。

4.3 異なる意見と価値観を持つ参与者らは円滑な相互行為を維持するためのプロセス

データ 2 では、RH がイギリス人が交際相手として好ましいとする理由を語る中で「交際相手に自分の働き方及び生活のし方が理解されないことは交際を続ける上で困難である」という点に関して、参与者らは共感を示し、この認識が共通基盤化されていた。データ 3 では、RH・RM が外国人との交際に憧れを持つのに対し、EH には実際に日本人と交際しているため、「外国人との交際が理想的であるかどうか」を巡り、意見と価値観の不一致が表面化していた。この場面において EH は、既に共通基盤化された認識を提示しつつ、EH の個人の見解として自分には日本人との交際の方が好ましいと説明したため、異なる意見を持つ RH と RM もこれを理解し、共感を示していた。データ 4 では、外国人との交際に憧れを持つ RH・RM の意見に合わせるための、EH の発言をきっかけとして自己卑下とその否定、褒めとその否定といった繰り返しのプロセスが行われる。これらは自己卑下や褒めにより、外見を巡って参与者らの立ち位置が不均衡になることを避けるために行われたプロセスであった。その後、仮説のシナリオがジェスチャーや笑いの共起を伴って協働構築されたことで、参与者間の意見と価値観の不一致が後景化し、「将来の母親」としての同一の立ち位置と、「将来の子供には外見が良く育って欲しい」という点において参与者らが同意していることが前景化されていた。

このような参与者らによる相互行為のプロセスをまとめると、参与者らは円滑な人間関係を維持するための同調を志向する会話を行なっていると言える。本データにおいて、参与者らは異なる意見や価値観を持っていたとしても、自分も相手と同じ状態であれば同じ意見や価値観を持つであろうという点において共感を示していた。また、参与者間で不均衡な立ち位置に位置付けられることをなるべく回避し、同一性を前景化していた。今回観察したデータにおいて、参与者らは自分たちの意見と価値観の不一致を解消してはいない。周辺的な要素において同意もしくは共感を示すことで互いの意見や価値観を尊重しつつ不一致を後景化していた。参与者全員が同一の立ち位置から同意できる内容に関しての仮説のシナリオの構築と笑いの共有が行われたことにより、本稿で扱ったデータでは、最終的に参与者らは円滑に同調を達成していた。

5. 結語

本稿では、20 代の女性らによる多人数会話をデータとして、参与者らが外国人との交際に関して異なる意見と価値観を持つ中で相互行為を行う様子を分析した。その結果、参与者らが友人同士との私的な会話において外国人との交際への憧れを語る中で、本来排除や差別の文脈で行われるステレオタイプの表出が観察された。また、参与者らが前景化する立ち位置や意見を調整し、共通基盤化や仮説のシナリオの協働構築による笑いの共有を行なうことで、意見と価値観の不一致を解消しないまま後景化していることが観察された。このようなプロセスにおいて、同時笑いや同期したジェスチャーなどを行い、参与者らは共感、協調、同一性を示し合うことで同調を志向する相互行為を行っていることが明らかになった。

トランスクリプト記号

[	オーバーラップ記号	¥ ¥	笑いながらの発話	,	音節の区切り
(.)	0.2秒以下の沈黙	(())	ジェスチャー	?	質問
(0.0)	それ以上の沈黙	:	長音	( )	不明瞭な発話
-	言い淀み	=	続けて聞こえる発話		

参考文献

Bamberg, Michael (1997). Positioning between structure and performance. Oral versions of personal experience: three decades of narrative analysis. *A special issue of the Journal of Narrative and Life History*, 7, pp. 335–342.

Bamberg, Michael (2004). Form and functions of 'slut bashing' in male identity constructions in 15-year-olds. *Human Development,* 47, 331-353

Boxer, Diana & Cortés-Conde, Florencia (1997). From bonding to biting: conversational joking and identity display. *Journal of Pragmatics*, 27, (3), 275-294.

Clark, H., Herbert (1996). *Using language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Georgakopoulou, Alexandra (2001). Arguing about future: On indirect disagreement in conversations. *Journal of Pragmatics, 33, 1881-1900.*

秦かおり (2019). 「タスク達成場面における共同行為—折り紙場面を事例に—」, 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝編『動的語用論の構築に向けて第1巻』, 47-66, 開拓社.

Hay, Jennifer (2000). Functions of humor in conversations of men and women. *Journal of Pragmatics, 32, 709-742.*

Holmes, Janet (2006). Sharing a laugh: Pragmatic aspects of humor and gender in the workplace. *Journal of Pragmatics,* 38, 26-50.

Jenkins, Mercilee (1985). What's so funny? Joking among women. In: Bremner, S., Moonwomon, B. (Eds.), *Proceedings of the First Berkeley Women in Language Conference*, 135–151, Berkeley, CA.

児島麦穂 (2019). 「笑いの相互行為性—多人数会話における不均衡状態から笑いの共有に至るプロセス—」,『社会言語科学会第43回大会発表論文集』, 66-69.

松村明編 (2006).『大辞林』第三版, 三省堂.

Murata, Kazuyo & Hori, Motoko (2007). Functions of laughter in intercultural communication: An analysis of laughter as communicative strategy, 『国際社会文化研究紀要』9号, 115-124.

Namba, Ayako. (2011). *Listenership in Japanese interaction: The contributions of laughter*. Doctoral Dissertation, The University of Edinburgh.

難波彩子. (2018). 「男女の会話の共創 リスナーシップとアイデンティティ」, 村田和代編『聞き手行動のコミュニケーション学』, 209-240, ひつじ書房.

Pomerantz, Anita. (1978). Complimenst response: Notes on the co-operation of multiple constraints. In Jim. Schenkein (Ed.). *Studies in the organization of conversational interaction.* 79-112. New York: Academic Press.